

日本語の談話における「ほめ」の機能

山路, 奈保子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494572>

出版情報 : 比較社会文化研究. 15, pp.109-118, 2004-02-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :



日本語の談話における「ほめ」の機能

ヤマ ジ ナ オ コ
山 路 奈 保 子

1. はじめに

本稿では、日本語の談話における「ほめ」の持つ機能についての考察を行う。

ほめは「依頼」のように相手の行動を直接操作しようとするものではない。また、「謝罪」のように、行わなければただちに支障をきたすというものではない。しかし、適切な場面で適切な内容のほめを行えるかどうかは、会話を円滑に進め、良好な人間関係を築けるかどうか大きな影響を与える。例えば手料理をご馳走になった人が、料理の出来についてひとことも発さなかった場合、日本社会ではそれは「おいしくなかった」と解釈されるのが自然であろう。

しかし、ある場面・状況でほめを行うかどうか、そしてどのようにほめるかの判断は文化・社会によって異なる。日本社会では料理をご馳走されれば「おいしい」と言うのは当然のように思われるが、このような場面で日本人が「おいしい、おいしい」と言うのを見て、留学生がそれを奇異に感じる例が紹介されている¹。また、日本語を話す外国人と接触した際に日本人がよく発する「日本語が上手ですね」というほめについても、ほめられた側が自分の日本語力が十分でないと感じている場合には、戸惑いを感じ、さらには皮肉と受け取ってしまうこともある²。

ほめの判断にずれが起こる原因としては、どのような効果を期待してほめを行うのかということ、すなわち、ほめが担っている機能の違いがあると考えてよいであろう。では、日本語の談話におけるほめはどのような機能を担っているのだろうか。Wolfson (1983) は、アメリカにおいてはほめが社会の潤滑油 (social lubricants) として機能すると述べているが、それは日本社会でも同じであるだろうか。

2. 〈マイナスを埋める〉ほめの機能

上に挙げた例とは反対に、日本語非母語話者の側から発せられるほめでよく問題にされるのは、目上に対するものである。例として、「先生の授業はとてもよかったです」などのようなほめは、評価できる立場にないのに評価を下している点が問題であるとされる (川口・蒲谷・坂本1996など)。

しかし、それだけでは説明できないケースもある。筆者自身の経験であるが、ある初級クラスではじめて授業を行ったあとで、南米出身の学習者のひとりから「You taught very well」といわれ、ショックを受けたことがある。それは、経験の浅い不慣れた教師だと思われたのではないかと考えたからである。それまでにも、受け持った学習者から「先生はとても上手に説明しました」など、日本語母語話者なら発しないであろうほめを受けたことは何度もあったが、違和感はあるにしても、それは良い評価を受けたとして素直に受け取った。つまり、下の立場から評価されてしまうことに慣れていてもなお、授業後に受けた「You taught very well」というほめには、受け入れがたいと思う別の要因があったと考えられるのである。

実は、そこには「なぜこの学習者が『先生をほめよう』と考えたか」という動機の解釈の問題が大きく関わっている。ほめられた筆者の側の解釈は次のようになる。

学習者は「先生は今日の授業でうまく教えられなかったと
思っているかもしれない。よって、『あなたは上手に教えた』
という情報を与えれば、安心するだろう」と考えた。

つまり、「うまく教えられなかったかもしれない」という不安を筆者が感じていると学習者が認識したことが、ほめの動機になっていると解釈したわけである。そして、そのような不安を常に抱えた不慣れた教師であると認識されたと感じてしまったのである。

1 文化庁文化部国語科 (1994)

2 文化庁文化部国語科 (1994)、大滝 (1994) など

日本語学習者に対する「日本語が上手ですね」というほめにある動機も、これと同じように解釈できる。相手が「自分の日本語は下手で、うまく通じないかもしれない」という不安を抱えていることを前提として、その不安を軽減しようとしてほめているのである。相手が上級の話者であると認識していれば、このようなほめはかえって起こりにくいはずである。

ほめにはこのように、相手の不安を解消させる意図で行われるものがある。さらに、ほめを観察してみると、ほめが起こる条件として、上記のような「不安」を含め、ほめられる側、あるいはほめられる側とほめる側との間柄になんらかのマイナス要素があるという認識がほめる側にあることが明らかになってくる。ほめる側は、そうした認識のもとに、そのマイナスを〈埋める〉ことを意図してほめを行うのである。

以下、ほめのこうした〈マイナスを埋めるもの〉としての機能について、具体的な例から考察していく。

3. 観察方法

ほめについての研究は、Manes and Wolfson (1979)、Holmes (1988)、Herbert (1990) など、実際に発生したほめとその返答を観察者が書き留める民族誌的方法による量的研究が主である。これらの研究では、ほめ手と受け手の関係（男女／上下）やほめる対象となるもの、用いられる語彙や構文などに焦点が当てられており、それらの分析を通じてほめの機能に関する考察が行われている。

しかし、「ほめ」が起こる条件を明らかにするためには、ほめる側とほめられる側の関係や、それぞれの心理状態を見極められるだけの長いコンテクストが必要である。聞き書きによって集められたデータにはその点で限界がある。また、ほめを行うにいたる過程や、ほめのもたらす効果は、表面からでは観察しにくい。

そこで、本研究では、小説を素材としてほめの機能の観察を行う。小説の会話中にほめが起こっている場合、そこにいたるまでの過程やその効果が前後に描かれていることが多い。また、小説は現実のコミュニケーションを正確に反映するものではないが、日本語で書かれ、日本語で読まれる範囲において、作者は、登場人物の言動や心理が読み手に十分理解されることを前提に書いているはずであり、そこには、作者と多くの読者が共有する価値観や行動基準が反映されているとみてよいであろう。

対象とした小説は1990年以降に書かれた作品で、一人の作家につき一作品（短編集は一冊で一作品として扱う。またその場合「作品名」とは短編のタイトルではなく、本の表題を示す）として、30作品（男性作家のもの・女性作家

のもの各15作品）を扱った。作品名は表1に挙げるとおりである。

なお、主たる登場人物が非日本語母語話者であるもの、設定が現代日本ではないものは対象としていない。

表 1

作家と作品名
浅田次郎 『姫椿』
江国香織 『きらきらひかる』
大沢在昌 『らんぼう』
折原 一 『耳すます部屋』
恩田 陸 『三月は深き紅の淵を』
桐野夏生 『OUT』
北村 薫 『ターン』
鷲沢 萌 『君はこの国を好きか』
重松 清 『ナイフ』
篠田節子 『女たちのジハード』
志水辰夫 『いまひとたびの』
真保裕一 『奇跡の人』
鈴木清剛 『ロックンロールミシン』
鈴木光司 『光差す海』
田口ランディ 『ミッドナイト・コール』
辻 仁成 『海峡の光』
天童荒太 『孤独の歌声』
夏樹静子 『霧の向こう側』
乃南アサ 『ボクの町』
東野圭吾 『嘘をもうひとつだけ』
藤原伊織 『テロリストのパラソル』
宮部みゆき 『寂しい狩人』
村上春樹 『神の子どもたちはみな踊る』
群ようこ 『へその緒スープ』
山田詠美 『ぼくは勉強ができない』
山本文緒 『恋愛中毒』
唯川 恵 『恋人達の誤算』
湯本香樹実 『夏の庭』
吉田修一 『熱帯魚』
吉本ばなな 『とかげ』

4. ほめとは何か

先行研究におけるほめの定義では、Holmes(1988)による

A compliment is a speech act which explicitly or implicitly attributes credit to someone other than the speaker, usually the person addressed, for some 'good' (possession, characteristic, skill, etc.) which is positively valued by the speaker and the hearer. というものがある。他の研究では、ほめの定義は明確にはされていない。

ここでは、ほめを「聞き手自身やそれに属するもの、あるいは聞き手の言動に対して、明示的または暗示的に肯定的な評価を述べるもの」と緩やかに定義しておく。

ほめの意図を分析する上での便宜上、ここでは聞き手本人を対象としたほめのみを扱うことにする。ただし、「子

供がよくしつけられている」というように、明らかに聞き手の功績として賞賛する意図が認められる場合は、分析の対象に加える。

また、下の例のように、直接には評価されている人物以外に向けられたものであっても、話し手が当該人物も聞き手に含まれることを明らかに意識している場合は、当該人物に対するほめと考える。

- (1) 「大したもんだぞ。窃盗の、それも常習犯だ。叩けばヤマ(余罪)がばんばんでるだろうな」
 まるで自分のことのように得意そうな顔をして話す七丁目交番の所長と永井地域二係長の隣で、三浦自身は恥ずかしそくに笑っている。(乃南アサ「ボクの町」)

なお、以下の分析ではほめを発した人物を「ほめ手」、ほめの対象となった人物を「受け手」と呼ぶことにする。

5. ほめの種類と〈マイナス要素を埋める〉

機能の関係

小説中に現れたほめを観察すると、ほめは大きく4つの種類に分けられることがわかる。すなわち、①相手からのプレゼントや相手の服装などに対するほめ＝〈相手何らかの評価コメントを期待しているものに対するほめ〉、②子供や職場の部下などに対するほめ＝〈未熟な存在に対するほめ〉、③相手から表明された不安などに対する否定の形で現れるほめ＝〈相手の不安や落ち込み、不快感を解消するためのほめ〉、④親密な会話に引き込むための地ならしとしてのほめ＝〈相手との距離を埋めるほめ〉の4種類である。

このうち、①はほめが起こることを受け手があらかじめ予測あるいは期待しているという点で、他とは大きく異なる。①においては、マイナス要素があらかじめ存在するのではなく、むしろほめないことによってマイナスが生じうるといふ性質を持つものである。それに対して②～④は、ほめるかほめないかは個々人の判断にかかっており、マイナス要素への認識や、相手との関係の算定の仕方によって、ほめ方も大きく異なる。ほめ方を誤ると、2章で挙げた「学習者からのほめ」の例のように、かえってマイナス要素を新たに発生させることになってしまう。

これらの具体的な例とともに、ほめがどのように機能しているかを見ていく。

5. 1 相手何らかの評価コメントを期待しているものに対するほめ

「はじめに」で挙げたように、料理を提供された場合に

はほめるのが自然であり、何も言わなければマイナス評価をしたと受け取られる可能性がある。料理の他にも、プレゼントを受け取った場合なども同様であろう。

- (2) (主人公たちは、死んだ同僚の娘である「美代子」の卒業と就職を祝うために集まっている)
 最後に池谷が卒業記念に買って来た伊勢丹の包みを差し出した。美代子があけると、とき色のセカンドバッグが入っていた。材質はスウェード。なかなか上品なバッグだった。「まあすてき。これをわたしにくださるんですか」
 「気に入ってもらえたらうれしいのだが」
 「うれしいわ。どうもありがとうございます。ひとつ欲しかったものですから喜んで使わせていただきます」
 (志水辰夫「いまひとたびの」)

料理もプレゼントも、通常は相手が喜ぶ＝相手がプラス評価をすることを前提として提供するものであり、ほめはそれに対する答えであるといえる。また、料理やプレゼントのように相手に供するもの以外でも、作品や写真など、相手にあえて何かを見せた場合も同じことがいえるであろう。

さらには、新しい服などを身につけている時や髪型を変えた時なども、それを見た相手がプラスに評価することを暗黙のうちに期待している場合がある。評価を期待した相手が何も言わなければ、マイナスに評価されたと考えられるであろう。

- (3) (「侑里」を恋人の「透」が外食に誘った)
 侑里はさっそくポストンバッグにあった白いワンピースに着替えた。
 「どうしたんだよ、それ」
 透が驚いて、侑里を眺めている。
 「ちょっとね。どう、似合う？」
 「うん。こうして見ると、やっぱり侑里もなかなかだな」
 「でしょう。ねえ、早く行きましょうよ」
 (唯川 恵「恋人達の誤算」)

ただし、料理やプレゼントの場合とは異なり、服装や持ち物に関しては、必ずしも相手からの評価を期待しているわけではない。ある対象にほめを行うことは、ほめ手がその対象に注目していることを意味することになる。上の例で言えば、二者は「恋人」という関係であるから、ほめ手が受け手の服装に注目し評価することを受け手が当然のこととして期待しており、ほめ手はそれに応えているのである。しかし、このような親しい関係以外では、新しい服を着ているからと言って、見た人から評価されることを期待するとは限らない。このようなほめは、受け手が評価を期待していると判断できる限りは問題なく行えるが、そうでない場合は注意が必要である。

なお、料理やプレゼントに対するほめでも、ほめの対象となるのが常に可能なのは料理やプレゼントそのものであり、受け手の能力にまで言及するかどうかは受け手との関係に左右される。下の例では、年配の男性が、親しい関係にある若い女性の料理をほめているが、親しくない関係であったり、受け手のほうが目上であったりする場合には、このようなほめ方はしにくいであろう。

- (4) 「いやあじつにおいしいよ。料理の腕だって大したものだ。こうなったら次は婿さんの世話しなきゃいかんな」
(志水辰夫「いまひとたびの」)

5. 2 未熟な存在に対するほめ

「誰かが誰かをほめる」という光景を考えた場合、すぐに思い浮かべるのは、「親が子供を」「先生が生徒を」といった場面であろう。下の例は、上司から部下へのほめである。

- (5) (見習い警察官の「聖大」が、指導役の「宮永班長」が見守る中、拾得物の受理手続きを一人で済ませた)
「これで、よしと。行きますか」
振り返ると、宮永班長は何となくにやにやと笑いながら「おう」と応えた。
「まあまあ、ちゃんと出来たじゃないか」
「もう、ばっちりっすよ」
(乃南アサ「ボクの町」)

ほめは第一に、ほめ手が受け手の成長に何らかの責任を持っている場合に典型的に表れる。ある行動や状態に肯定的評価を与えることにより、その繰り返しや継続を促しているのである。Wolfson (1983) はこうしたほめをencouragementと呼び、次のような例を挙げている。

- (教授から大学院生に)
“That was outstanding. The theory was well presented and the examples were marvelous”

このような関係では、受け手は未熟な存在であり、ほめはその未熟さを〈埋め〉て成熟へと導く方法のひとつとして行われている。

大人から子供に対するほめは、ほぼすべてがこれに相当すると考えてよいであろう。子供の成長には、親や教師だけではなく、その社会を形成する大人全体が関わっているからである。

- (6) (小学6年生の「ぼくたち」は「古香弥生さん」というおばあさんを訪ねて老人ホームにやって来た)
古香弥生さんはいますか、とぼくがきいた。

「今日は面会の予定は入っていなかったけれど」壁の掲示板をちらっと見て、おねえさんはまばたきした。「会いに来たの?」

ぼくがうなずくと、おねえさんは「遠いのにえらいわねえ」と言った。ほんとに遠い。ぼくたちは2時間電車に乗り、それからバスに乗ってやっとここまでたどり着いたのだ。

「古香さん、喜ぶわよ、きつと」おねえさんにはここにこしている。「お孫さんよね?」

(湯本香樹実「夏の庭」)

ここで「おねえさん」がほめているのは、相手为孩子だからである。大人が同じ行動をとったとしてもプラスの評価は下されるであろうが、それがほめの形をとりにくいのは、大人には〈埋める〉べき未熟さが無いからである。もしここでほめると、それは相手が未熟な存在であることを前提としていることになってしまう。従って、大人に対しては、「大変だったでしょう」などのように、ねぎらいの形をとるか、あるいは、「なかなかここまでいらっしゃる方はいないんですよ」などと、高い評価をしていることを間接的に伝える方法(6.4で述べる)を選択するであろう。

5. 3 相手の不安や落ち込み、不快感を解消するためのほめ

小説中のほめを観察していると、相手が述べた不安や弱音、謝罪などへの否定としてのほめが数多く見られる。これらは相手の感情の中にあるマイナス要素を認識して、それを〈埋める〉ために行うほめである。5.2であげたものと同様に、ある行動や状態に肯定評価を与えることにより、その繰り返しや継続を促すものではあるが、二者の関係は5.2のような未熟な者とその成長に責任がある者の関係とは限らない。

- (7) (医者と患者)
「まだまだぼくは子供だから、自分のしたことを受け止められない。だから心配で、何も打ち明けられない。そう思ったのかな、と」
「いや、君は大人だよ。そんなふうに考えられるのだからね。そこらにいる大人より、君は立派な大人かもしれない。先生はそう思う。本当に君には驚かされてばかりだ」
(真保裕一「奇跡の人」)

上の例は、先行して表明される感情とほめのトピックの間に直接の関係があるが、下のように、別のトピックをもちだしてほめる場合もある。

- (8) 「流実子」は弁護士事務所に勤めている。その事務所に編集者の「工藤」が来て弁護士を待っている
 「申し訳ありません。二時には必ず戻ると言っていたんですが」
 「いいんだよ。君がそんなに気にすることはないよ」
 工藤はいつものように穏やかにほほ笑みながら、流実子に言葉をかけた。
 「編集者は待つことになれているんだ。先生が忙しいのはよくわかってる。それにしても、君はコーヒーを入れるのがうまいね。ここに来ると、君のコーヒーが飲めるのが楽しみなんだ」
 「ありがとうございます」
 流実子は少し照れて、肩をすくめた。

(唯川 恵「恋人達の誤算」)

また、以下の例は、直接の意図としては受け手が直前に表明した心配に対する否定であるが、そこに至るまでの過程を見ると、ほめ手の側にさらに別の意図が働いていることがわかる。

- (9) (刑事の「ウラ」は、相棒の「イケ」を連れて、寂れたゲイ・バーに来ている。経営者の「トミー」は「ウラ」にとって昔馴染みであるが、「イケ」のほうは初対面で、「トミー」を気味悪がっている)
 「何年目になる？」
 「もう15年よ。嫌になっちゃうわ。このまま減っていくのかしら」
 (中略)
 「老けすぎじゃねえか、ちっとよ」
 ウラがいった。
 「しょうがないわよ。手術してんだから、ホルモンのバランスとかが狂っちゃって、こうなるのよ」
 (中略)
 イケは煮物に目を落とした。
 「あら、まだ竹の子固かった？」
 「そんなことはねえよ。よく味がしみてる」
 ウラがいった。

(大沢在昌「らんぼう」)

直接には料理をほめているだけであるが、その直前に、バーが寂びれ、自身も老いていくことを受け手が嘆く場面が描かれている。さらに、ほめ手の連れが受け手にいい感情を抱いていないことが明らかにされている。そうしたマイナス要素への認識から、ほめ手が受け手を思いやって、単に「おいしい」などという曖昧な表現ではない、具体的に強いほめが現れたものとみてよいであろう。

また、以下のようにほめが相手を説得する材料として用いられている場合もある。これも、相手を感じるであろう不安や負担感を先回りして埋めようとするものである。

- (10) 「タカシ」と「ケンジ」は大学生。高校のとき、同じ文芸部に所属していた。就職のことが急に気になって電話してきた「タカシ」に、「ケンジ」は作家になるために勉強していると言い、「タカシ」にもそれを勧める
 「お前も勤め人には向かないんじゃないのか。書いてみればいいじゃないか。おれ、高校のときに文集に載った詩を読んだけど、なかなかよかったし。(中略)」
 あの変てこな、壮大な宇宙がどうのこうのという詩を彼に覚えられていたのが、ものすごく恥ずかしい。
 「おれ、才能ないもん」
 (群ようこ「へその緒スープ」)

以下のほめは謝罪に伴うほめであるが、これも先に自分が相手に与えた不快感を埋めるために行っていると考えてよい。

- (11) (「スポーツシャツ」の男が、主人公である子供たちを「のぞき」と間違えたことを謝罪している)
 「オレよ、おまえらみたいなクソガキが、こんないいガキだと知らなくてよ。さっきは悪かったな」
 (湯本香樹実「夏の庭」)

また、相手への批判に先行して表れるほめもある。上の例とは反対に、先にほめによってプラスを行っておいた後で、批判というマイナス要素を相手に与えている。

- (12) (「聖大」は見習警察官。勝手な行動をとったが、その結果として、犯人逮捕にこぎつけた。「課長」に「今夜のヒーローはお前だ」といわれ、つい調子に乗ってしまった「聖大」に、「課長」が再び言う)
 「実際、今夜のことは、よくやった。終わりよければすべてよし、だ。だが、覚えておくん」
 「は——」
 「我々の仕事に、ヒーローはいらない」
 頭を殴られたような気がした。それでは、聖大は不要ということではないか。
 (乃南アサ「ボクの町」)

Wolfson (1983) は、butやthoughに続き批判が現れるようなほめについて、受け手との関係を維持し調和を保つ必要性から、批判を和らげるために使われるとしている。しかし、上の例などは、ほめ手が受け手に気を遣って先にほめているとは考えにくい。このようなほめは、批判を和らげるというよりはむしろ、ほめる＝相手を部分的に認めることによって、批判がより説得性をもつようにする効果を意図したものと見るほうが妥当であろう。

5. 4 距離を埋めるほめ

Wolfson(1983)は、特に久しぶりに会った者どうしの間で、あいさつに付加する形でほめが現れやすいことを述べ、

これをprelude to opening a conversationとしている。こうしたほめは日本語にも現れる。下の例は、あいさつに相当することは述べられていないが、ほめ手と受け手が再会して最初の発話である。

- (13) (「児玉」と「井上」は、死んだ同僚の娘である「美代子」の卒業と就職を祝うための集まりで、7年ぶりに再会した) 「なんだ、車で来たのか」ソファに寄りかかっていた井上が姿勢も変えずに言った。「そういえば今日はもう25日か。このごろ時間のたつのが早いこと、どうだい。しかし児玉くん、なかなかいい顔になってきたなあ。経営者の風格が出てきたぞ」
「これはただの日焼けだよ。毎日こまねずみみたいに走り回っているんだ」
(志水辰夫「いまひとたびの」)

久し振りに会った者同士では、以前と比べて距離ができている。こうした場面に現れるほめは、その距離を埋めて親しい者同士としての会話を改めて開始するための「地ならし」の役目を果たしている。

こうしたほめは、会った直後だけに用いられるのではない。次の例は、同窓会が始まってからしばらくたってからの会話で、会話がいったん途切れた後にあらためて話しかける際にほめが用いられている例である。

- (14) (学生時代の仲間の集まりで)
その間に、文子は、汚れた皿を取りまとめて、テーブルに空きを作っていた。聖大の関心は、どうしても文子に集中せざるを得なかった。
「よく気がつくんだね」
聖大が話しかけると、文子はくすりと笑いながら、会社の宴会で慣れているのだと答えた。
(乃南アサ「ボクの町」)

この例では、「聖大」は学生時代からの仲間である「文子」と新しい関係を築くべく、会話に引き込もうとしており、そのための「地ならし」としてほめている。

以下の例では、言いにくい話題に入る前の「地ならし」として、ほめが用いられている。

- (15) (「私」—「笑子」は、同性愛者の「睦月」と結婚して間もない。二人のマンションに、「睦月」の父親が初めて訪ねてきた)
「すぐに失礼するよ、おかまいなく、ちょっと様子をみにきただけだから」
そういわれて、私は思い切り緊張した。様子って、何の様子だろう。私の両親も睦月のお母さんも大賛成してくれたこの結婚に、ただ一人反対していたのがこの義父なのだ。
「いい部屋じゃないか」

はい、おかげさまで、とこたえてしまってから、おかげさまでというのはいふん卑屈な言葉だなと思った。
「とうとう結婚してしまったね」
義父はいきなり本題に入った。
(江国香織「きらきらひかる」)

6. 過剰なほめ

5章ではさまざまな種類のほめについて、マイナス要素を〈埋める〉機能という側面から見てきた。6章では、このマイナス要素に比してほめが過剰であった場合について考察する。

6. 1 ほめの失敗

ほめは、過剰になると失敗する場合もある。

- (16) (「ほく」と「黒川礼子」は同級生である)
ほくは、心の中でそうつぶやきながら、小さなグラスを手にする礼子の横顔を見ていた。
「黒川さんて、ほんと、綺麗だね。頭も抜群だし、怖いものなしだね」
礼子は、ちらりとほくを見ていった。
「だから、なんだっての？」
「誉めただけだよ。人の誉めを素直に受け取ってくれよ」
(山田詠美「ほくは勉強ができない」)

「ほく」と「礼子」は同級生であるが、それほど親密な仲ではない。「ほく」が行ったほめは親密さへの地ならしであるが、「綺麗だ」「頭も抜群」などというほめは、一時的に努力して得た結果などに対するほめとは違い、本人の属性そのものにかかわっている。これは単なる地ならしとしては大きすぎる、過剰なほめであり、相手を必要以上に高い位置に置いてしまう。それゆえに、「だから、なんだっての？」というように、何か別の意図があることを警戒されているのである。

6. 2 皮肉

通常の「ほめ」と同じ肯定的評価を述べながら、「ほめ」と解釈できない場合がある。

- (17) (「ウラ」と「イケ」は刑事。通りかかったやくざの若者を問い詰めていたが、「ウラ」がすぐに若者を解放してしまったので、「イケ」が不満を述べている)
「ああいうのは今のうちにシメといたほうがいいんだよ。見たろ、一丁前にスケコマシのカッコシやがって…。もう、ソープの2、3人は飼ってるってツラだぜ」
「そんな女がいたらこのこ歩いちゃいねえさ」
「やさしいねえ、ウラさんは」

イケはため息をついた。

(大沢在昌「らんぼう」)

「やさしいねえ」という言葉だけをとりだせば、「ほめ」と解釈することも可能である。これが皮肉と解されるのは、その前に、トピックとなっている受け手（「ウラ」）の行動に対して、ほめ手（「イケ」）がプラス評価をしていないことがはっきり描かれているからである。さらに、「やさしいねえ」という言葉は、この話し手が粗暴な言動を取る人物として描かれていることを考えれば、かなりストレートで強いほめ言葉といえる。つまり、文脈上プラス評価をしていないのが明らかなのに、過剰なほめ言葉を述べることによって、ほめではなく皮肉となっているのである。

Holmes (1995) は、ほめの内容が事実から遠いと感じられる場合は、皮肉あるいは反語によるこき下ろしに聞こえたとし、明らかに下手なピアノ演奏に対し「とても上手だね」などと言う例を挙げている。これは、事実と反対のことを述べることによる皮肉である。それに対して、上にあげた例の「やさしい」という言葉は、事実と相反しているわけではない。肯定的に評価するならそのように述べることも可能である。つまり、これらの例は、「やさしい→甘い」というように、ことばの意味を肯定的評価から否定的評価にずらして読み替えることを前提にした皮肉である。

6. 3 突き放し

先行研究では、「相手を快い気持ちにさせる」「相手との関係を維持・強化する」ことがほめの基本的機能とされているが、ここで挙げるほめは、それとは異なる働きをしている。下の例は、皮肉ではないにもかかわらず、聞き手を快くさせるのではなく、むしろ当惑させることを意図している。

- (18) (「聖大」と「三浦」は、ともに見習い警察官である。「三浦」が優秀だと評判が高いのに対し、「聖大」は何も成果をあげられず、自分が警察官に向いてないと思いはじめている)

「なんだか、最近の聖大、変わったな」

寮に帰る途中、三浦が神妙な表情で言った。

「大人になったっていうか、落ち着いているっていうかさ、前と雰囲気が違うよな。何か、格好いいよ」

聖大は思わず鼻で笑った。

「何、言ってんだよ。お前の方がよっぽど格好いいじゃないか。着々と成果をあげてさ、上司の受けもよくて。将来のビジョンもしっかりしてて。」

「だけどー」

「俺は駄目だな。このまま、いつまで続けたって、きっと一人も捕まえられないに決まってるんだ。なんだか最近、あきらめがついたっていうかー」

そこまで言いかけたとき、三浦の表情がこわばっているのに気づいて、聖大は慌てて口をつぐんだ。

(乃南アサ「ボクの町」)

ほめ手は、自身との比較対照の上で相手をほめている。ほめ手と受け手は同期生であり、同等の立場であるため、職務に関して相手をほめることは、相手とのバランスを崩すことになる。この談話で先にほめを行っているのは「三浦」のほうであり、「三浦」のほめによって傾いたバランスを「お前のほうがよっぽどかっこいいじゃないか」とほめ返すことによって元に戻しているが、続けて「着々と成果をあげて、上司の受けもよくて、将来のビジョンもしっかりしてて」とたたみかけることによって相手を過度に高い位置に挙げ、さらに「俺は駄目だな」と自分を下げることによってさらに距離を作り、「三浦」の側からバランスをとりもどそうとすることを封じている。この発話の焦点は、相手の能力の高さというよりは、自分と相手との間にある差である。ここでは、ほめは相手との間に親密な関係を築こうとするのではなく、相手との間に距離をおくことを意図して行われているのである。このように受け手側を自分との比較で過剰に高い位置に置くことにより、受け手を不安定な立場へと突き放しているのである。

ほめは、明示的ではなくても、自分との比較を含む場合も多い。同級生の成績へのほめ、同じ地位にある同僚の業績へのほめ、あるいは同性同士の容貌にかかわるほめなども、潜在的には話し手自身との比較が含まれていることが考えられる。そうした場合、ほめの受け手がほめを受け入れると、「自分が相手よりも優れている」ことを認めることになってしまう。そこで、多くの場合、受け手は、ほめをスケールダウンする、あるいは別の点で相手をほめ返すなどして、バランスを回復しなければ、不安定な立場に置かれ続けることになる。

そういった意味では、このようなほめは、自分と相手に関する再評価の要求という側面もあるといえるだろう。いちどほめ手と受け手とのバランスを壊し、受け手側にその修復を強いることによって、自分と相手との位置付けを再確認しているのである。

- (19) (同じ会社に同期で入社した3人。「わたし」は会社を辞め、自分で事業を興している。「池谷」は系列会社に「飛ばされ」ている。「井上」だけが会社に残って部長となっている)

「はく？冗談じゃない、ただの部長だよ。定年までに平取りになれたら上出来だろう。それより最近池谷くんのほうがすごいんだ。健康飲料がばか当たりして、今や大変な鼻息さ。急成長、高収益、系列会社のナンバーワンにのしあがっている」

池谷が当惑気味に微笑を浮かべた。井上の言い方には必ずしも言葉どおりではないニュアンスが感じられた。「たまたまそういう時代に巡り合わせたただけだよ。満を持してはじめた仕事は全部失敗している。時代のほうが、ぼくらより進んでいるんじゃないかってよく感じる」

「ファイバー飲料、オリゴ糖入り飲料、蛋白飲料、鉄骨飲料…なんとまあ、いろいろ考えつくものだよな。はっきりいって、ひところは考えられもしなかった際物だよ。こういうものが当たるんだからありがたいというか、あほらしいというか。まっとうなマーケットリサーチをやってる連中が見たら悲しくなってしまうよ」

(中略)

「健康食品ブーム自体が上すべり現象だったんだよな」井上が刺身に醤油をはたぼたつけながら言った。「だいたい食べ物としては下の下だもの。国民のグルメ志向に菌が立たなかったわけさ」

池谷の目が向かいから何か語りかけてきた。わかっている。わたしは黙って食事に戻った。「しかしきみはいいときに辞めたよ」井上はなおも言った。顔が赤くなっている。同じ口調で池谷にも言った。「きみもいいときに本社を出た。末は重役まぢがいなしだもんな」

(志水辰夫「いまひとたびの」)

ほめ手は、相手を「すごい」と持ち上げ、自分を下げることによって、受け手から「そういう時代にめぐり合わせたただけだ」という、自己に対するマイナス評価を引き出している。「ばか当たり」「鼻息」「のしあがっている」「際物」「あほらしい」などといった揶揄にも表れているように、ほめ手は暗に、自分の立場の正当性を認めるよう、受け手に求めているのである。

ただし、あえてこのような再確認作業を要求することは、自らの立場に関する不安の表明でもあるといえ、だからこそ受け手は、ほめ手との関係を維持する意志がある限り、その不安の解消に協力せざるをえないのである。

6. 4 過剰なほめを回避するための方策

以上のように、ほめは過剰であることによって相手に不快感を与えることもある。そうした過剰さを防ぐために、ほめはしばしば一見ほめとはわからない形式をとる場合がある。

次の例は、ほめではないことを形式上装うことによって、結果としてほめとして成功している。

(20) (女性刑事の「彼女」が、被害者の「おれ」の家を訪ねてきた)

グレーのスーツの下から伸びるふくらはぎが、微妙にゆれつつ、狭い玄関が上がってくる。きれいな脚をしていると、変な意味でなく見とれた。

彼女がおれの視線に気付いた。目をそらしたりするのが嫌で、そのまま脚を見ていた。

「何見てんの」

「折れねえのかよ、脚」

「え…」

「そんなに細くて。刑事ってのは走ったり飛んだりするんだろ、よく折れねえな」

「嬉しい、脚をほめられるのなんて滅多にないの」

「べつにほめたわけじゃねえよ」

(天童荒太「孤独の歌声」)

「脚が細い」ということは単純に言えばほめことばであり、事実話し手は「きれいな脚をしている」と心の中では評価している。にもかかわらず、ストレートにほめることはせず、「折れねえのかよ」と、表面上はあたかもマイナスに評価をしているように装っているのである。ほめ手である「おれ」は、「彼女」に対して表面上は反抗的な態度をとっていることもあって、ここで「きれいな脚だな」とストレートにほめるのは不自然であり、相手を警戒させてしまう。マイナス評価を装うことによって、受け入れられやすく、効果の高いほめとなっているといえるであろう。

次の例は、結婚披露宴でのスピーチであるが、「罵倒しながらほめる」という形式をとっている。

(21) 慶応のアメフト選手だったとかいう夫の友人代表が、これからあたしの夫となる人物をやたら褒めたたえている。

「こんなきれいな奥さんをものにしやがって、この馬鹿やろう！さあ、これを受け取れなかったらお前の愛は偽物だぞ」そう言って夫の友人代表は、夫にフットボールを投げてよこした。

(田口ランディ「ミッドナイト・コール」)

結婚披露宴では新郎新婦はほめられて当然の立場であるが、日頃ほめない間柄でほめを行うとわざとらしさを感じられるため、照れ隠しとして罵倒している。罵倒によってほめによる過剰なプラスを形式上打ち消すことで、ストレートなほめが可能となっているのである。

次の例では、形式上は肯定的評価のことばは現れないが、ほめであるが見なしうる。

(22) (「野地」は老刑事。「ウラ」は若い刑事。「小林」は子供を人質に公衆便所に籠城したが、「野地」に説得されて泣き出した後、自殺を図った。)

「体が動かんかった…」

小林を乗せた救急車が走り去ると、野地がくやしげにつぶやいた。

「かわりに口が動いてました。俺だったら途中でぶん殴っていたかもしれません。そうなったら、奴の罪が余分に増えた」

ウラはいった。かたわらのパトカーでは、公衆便所から連れ出した子供が、母親の腰にしがみついていた。怪我はまったくない。

(大沢在昌「らんぼう」)

評価的なことばは直接には現れていないというえ、後半は「俺だったら」という仮定を述べているだけである。しかし、ほめ手が真に伝えようとしているのは、「あなたが根気強く説得した結果、奴の罪は増えなかった→あなたの説得がよかった」ということであると解釈できる。この例では、受け手はほめ手の上司である。受け手の「くやしい」という気持ち(=マイナス要素)を埋める必要はあるが、一方で部下の立場からのほめは「過剰なほめ」であるといえる。そこで、直接的な評価を述べるのを避けながらも、プラス評価をしていることが伝わるような形式を選択しているのである。

7. まとめと今後の課題

本稿では、日本語のほめにある〈相手または相手と自分之間にあるマイナス要素を埋める〉機能について考察した。また、マイナスの程度に比して過剰であるほめは相手に不快感を与えるものであり、それを回避するためにしばしば直接的でないほめが用いられることを述べた。

本稿では、日本語の範囲内で日本語談話におけるほめの機能を探ってきたが、これがどの程度日本独特のものであるかは明らかではない。日本語母語話者と非母語話者の接触場面で、具体的にどのような問題が発生しやすいかはまだ明らかになっていない。

日本社会では、「ほめない」という選択が比較的多く行われていると考えられる。日本社会に属する者にとっては、「先生、今日の服とてもお似合いですね」などはなかなか言いにくく、思っても言わないという選択をすることが多いと思われるが、例えばトルコ人などはごく日常的にこうしたほめことばを発する。つまり、トルコ社会などでは、Wolfson (1983) が言うように、ほめが社会の潤滑油 (social lubricants) として広く用いられているが、日本社会では、仮に同じように潤滑油であるとしても、その使用にはかなりの制限があるといえる。5. 1で述べたように、日本社会では、「お似合いですね」とわざわざ述べるということは、相手の服装に注目し評価していることの表明であり、相手が自分によって評価されることを望んでいることが明らかでなければ、あえて行うべきことではないと考えられる。

どの社会でも、「ほめなければならない場面」と「ほめてはならない場面」があり、その中間に「ほめてもよいがほめ方に注意が必要な場面」が存在する。そして、文化によって「ほめなければならない場面」「ほめてもよい場面」と判断できる範囲が異なっているものと考えられる。日本語でのコミュニケーション能力を高めるためには、自文化では「ほめてよい」場面で日本人が「ほめない」という選

択を行っていること、従って、ほめなかったからといって、評価していないという意味にはならないことをまず知っておく必要がある。しかし、具体的にどんな場面がそのようなケースにあたるのか、本研究ではまだ十分に明らかになったとはいえない。さらには、「ほめない」という選択をした後、何も言わないのではなく、代替として「ほめ」以外の形式によって同様の意図を伝えている場合もある。その際に選ばれる形式とはどのようなものかということも、明らかにしていくべきであろう。

〈参考文献〉

- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge university press
- Herbert, Robert K. 1990. Sex-Based Differences in Compliment Behavior. *Language in Society* 19.
- Holmes, Janet. 1988. Paying Compliments: A Sex Preferential Politeness Strategy. *Journal of Pragmatics* 12
- Holmes, Janet. 1995. *Women, Men, and politeness.*:Longman
- Johnson, D.M. and Roen, D.H. 1992. Complimenting and involvement in peer reviews: Gender variation. *Language in society*, 21
- Manes, Joan and Wolfson, Nessa. 1979. The Compliment Formula. *Conversational Routine*. Coulmas, F(ed):Mouton
- Manes, Joan. 1983. Compliments: a mirror of cultural values. *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Wolfson, N and Judd, E(ed):Newbury House
- Pomerantz, A. 1978. Compliment responses: Notes on the co-operation of multiple constraints. *Studies in the organization of conversational interaction*, Schenkein, J(ed): Academic Press
- Wolfson, Nessa. 1983. An Empirically Based Analysis of Complimenting in American English. *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Wolfson, N and Judd, E(ed):Newbury House
- 大滝敏夫. 1996 「ほめことばの日独比較」『日本語教育』第15巻5号
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵. 1996 「待遇表現としてのほめ」『日本語学』第15巻5号
- 田辺洋二. 1996 「ほめことばの日・英語比較」『日本語学』第15巻5号
- 直塚玲子. 1980 『欧米人が沈黙するとき』大修館
- 日向ノエミ. 1996 「ほめことばの日伯比較—感謝とほめことば—」『日本語学』第15巻5号
- 古川由理子. 2000 「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』第10号 大阪外国語大学
- 古川由理子. 2001 「言語機能導入への一試案」『日本語・日本文化研究』第11号 大阪外国語大学
- 文化庁文化庁国語科. 1994 「異文化理解のための日本語教育Q&A」

大蔵省印刷局

- 丸山明代. 1996「男と女のほめ—大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析」 『日本語学』第15巻5号
- 山下早夜子. 2001「異文化間における語用の測定法」 飛田良文編『異文化接触論』おうふう
- 横田淳子. 1985「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」 『日本語教育』58号